

令和6年度協同農業普及事業に係る外部評価委員の意見等の概要

所属名	県北広域本部 農業普及・振興課	鹿本地域振興局 農業普及・振興課	県南広域本部 農業普及・振興課	芦北地域振興局 農業普及・振興課	球磨地域振興局 農業普及・振興課
普及活動課題 (農業普及・振興課活動 成果発表会発表課題)	存続の危機からの新生4Hクラブの再始動	鹿本独自の地域営農法人における省力技術導入	イチゴ×デジタル技術で生産性の向上に挑む！ ～担い手にとって魅力ある産地を目指して～	みなまた茶の収益確保に向けた産地力の強化支援	ナシにおける省力樹形と樹形に合わせたスマート機器の導入
高く評価される点	<ul style="list-style-type: none"> ・目的と手段が混同・不明瞭化しがちな長年続く業務の価値を再定義→組織内で共有→マンパワーをはじめとする経営資源を再分配→価値を具現化する視点から行動を変革。経営改善の進め方の鑑のような取り組み。 ・4Hクラブ員・普及指導員の「双方」の本業にとっての成長エンジン(農業経営力・普及指導力アップ)と位置付けたことがすばらしい。 ・4Hクラブ員と担当職員だけでなく、組織全体で対応し、支援体制を充実させたことで、クラブ員の増加に繋がっている。 ・多くの国民の関心事でもある食料安全保障を考える上でも、次代の農業の担い手となる若手農業者は極めて重要な存在である。その自主的な活動組織である「4Hクラブ」の再生は、熊本県農業の持続可能性に大きく貢献する意義ある活動であることから、普及指導活動上の課題設定が的確である。 ・4Hクラブの再生に向け、振興局の支援体制をチームで取り組む形にして拡充したことは「持続可能な普及指導活動」を考える上でも評価できる。 ・活動実績としても、5年間でクラブ員数が3倍に、自主活動の数も増加傾向にあり、「KPI」上もしっかりとした成果が上がっている。 ・4Hクラブ員と普及指導員との繋がりの大切さが伝わる報告だった。また、4Hクラブ員が「何よりも楽しむ」という気持ちが持っており、資質・経営能力の向上に繋がる。 ・4Hクラブ員は「人財」であり、普及を映す「鏡」である。この考え方は大切。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これからの農業の最優先課題のひとつである。栽培現場における省力化に真正面から向き合う取組姿勢に心より感謝したい。 ・担い手不足の受け皿である地域営農法人に省力技術(乾田直播栽培)をうまく導入している。 ・高齢化や離農による担い手不足がこれまで以上に急速に進むと予想される水田農業において、従来から省力化の鍵を握るとされてきた直播での実際の栽培現場で成果が期待できるところまでたどり着いたのは喜ばしい。 ・1年目の湛水直播の課題発見から、2年目は国の研究機関の力も借りて、乾田直播に切り替えて成果を確認できた点も、今後さらなる成果を期待させる展開。 ・2025年度はさらに取り組みが拡大するという点も力強い。 ・湛水直播と乾田直播の違いを見た上での次への取組が良くわかる発表内容だった。 ・農作業と経営の両面を良く見て考えた取組みで、水田のみならず麦等でも機械化によってコスト削減に繋がっている点を評価。 	<ul style="list-style-type: none"> ・定量・定性の両面を抑えた的確な現状分析が、本質的な課題設定と打ち手を外さないことに繋がるということを改めて教えてくれる好例。 ・栽培環境の「見える化」で作物の生育診断が可能となり、栽培管理の適正化に繋がっている。栽培経験の浅い農業者の収量増加に寄与している。集荷業務のDX化を通じて、集荷場の混雑が解消されている。 ・労働集約性が高いイチゴでは、担い手不足が産地の衰退に直結する恐れがある。そこを補う意味でもデータとスマート技術を活用したDXは欠かせない視点であり、そこに注目した取り組みの意義は大きい。 ・特に、出荷アプリと荷受け予約システムを使ったパッケージセンターでの生産性向上は他地域でも十分に活用できる事例であり、日本のイチゴ生産を支える成果になることが期待できる。出荷アプリの利用生産者が増えた点も心強い。 ・パッケージセンターの効率化と作業時間の短縮効果が非常に大きい。 ・栽培環境の「見える化」によって高収益に結びつく技術である。環境モニタリングの必要性や活用方法を生産者が理解することで、生産者全体の取組みに対する意識が高まっている点は素晴らしい。生産現場等におけるデジタル化に向けた取組みの進展状況が良くわかる発表内容であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普及指導の守備範囲かという古い意見もあるかもしれないが、マーケットインの視点で生産から販売までのトータルプランを描き、関係者を巻き込み実践する姿勢に感銘。 ・座して死を待つか、もしくは大胆な変革を成してようやく現状水準のリターンを得られるかという時代にあって、既存の固定観念や守備範囲の向こう側に立ってデザインと行動をする人材がどの所属かは問わず現れ、組織の壁を軽やかに超えて活躍する姿がイメージされた。 ・収益確保に色々なアプローチ。様々な課題解決に向け体制整備を図った点を高く評価する。 ・「みなまた茶」ブランディングのため、ターゲットに「マンガ・アニメ好き」を設定した発想を高く評価したい。これからの営農指導は栽培技術面だけでなく、ブランド力強化に向けたマーケティングやターゲット設定なども必要になると考えられ、産地力を「生産力+販売力」と位置付けた普及指導にアプローチしている点は、「農家が求める新しい普及指導員像」に繋がるかもしれない。 ・みなまた茶の「SWOT」分析から課題設定をしており、マーケットインの発想が随所に見てとれる。 ・県外や海外の消費者やバイヤーへのPRIに繋げた活動は意義がある。特に海外向けは販路開拓だけでなく、交流人口の増大に向けた次の動きにも繋がるのではないか。 ・コーディネート機能を活かした「課題解決に向けた体制構築」とスペシャリスト機能を活かした「販売力強化に向けた展開」がうまく機能している点が素晴らしい。 ・SNSをうまく活用していることが良く伝わる内容だった。ブランド化や認知向上を図るためにPR活動がいかに重要か良く理解できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これからの農業の最優先課題のひとつである。栽培現場における省力化に真正面から向き合う取組姿勢に心より感謝したい。 ・作業の省力化・軽労化により産地の維持が期待される。省力化に効果のある除草ロボットをうまく導入している。 ・産地維持のため、どの作物でも必要となる省力化に向けて「ジョイントV字樹形」という樹系に着目した点は大きい。将来的には収穫ロボットの開発などスマート農業につながる有望技術であるとの考えも心強い。 ・知見を「球磨地域版ジョイントV字樹形の手引き」として配布予定という点も、更なる普及拡大に向けて期待が持てる。 ・作業時間40%削減の成果は素晴らしい。省力樹形による労力削減の取組みは、今後も広がっていく技術だと考える。今後の普及拡大に向けて取組みの加速化を期待したい。
今後改善すべき点	<ul style="list-style-type: none"> ・取組みを継続して貰いたい。 ・4Hクラブによる活動の広がりという点ではどうか。例えば消費者向けの情報発信。若い感覚を生かし、お金をかけずにSNS等で“バズる”など消費者向けの情報発信に向けて、農家と一緒に知恵を出し合ってほしい。 ・経営面でどのような改善に繋がっているのか詳しい内容を知りたかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・湛水直播栽培にも営農上のメリットはあるため、この方法でスクミリンゴガイの食害を無くす技術を検討して貰いたい。 ・鹿本地域だけでなく他の地域でも通用するかどうか気になる。1年に1回しか試すことができない点はもどかしいが、熊本県内全域に広げていけるよう、多くの地域で直播に挑戦してほしい。 ・適切な除草管理を徹底する必要があるが、それなりの労力を要する。労力不足が危惧されるなか、今後も労働力の観点から現場課題解決に取り組んで貰いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハウス内の環境モニタリングデータを活用し、せつかつならハウス環境を自動制御まで繋げたいが、気になるのはコスト。他県のイチゴ産地とも連携して装置を使用する生産者を増やすことでコスト低下を目指すことはできないか。データ活用もさらに事例が増えることで、より精度が上がってくることを期待したい。 ・気候変動による農業生産への影響が危惧されている。特に高温対策は喫緊かつ重要な課題として捉え、今後、取組みを着実に進めてもらいたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を他地域にも波及させて貰いたい。新品種の普及がどこまで広がるか期待したい。 ・茶生産を体験と結び付け、海外からの交流人口拡大なども狙いたい。近年、熊本空港の新規就航も進んでおり、水俣であれば、鹿児島空港からのインバウンド流入も狙える。体験を売る「コト消費」を鍵にしたブランド化も十分に考えられる。 ・栽培上の課題(高温対策など)に対するアプローチなど技術面での取組みについても触れて貰いたかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の審査上は「定量的な成果」がまだこれからというところがあつたかもしれないが、これは品目の特性上、各経営体の改植ペースによるもの。これからも計画的に省力樹形の導入拡大をお願いしたい。 ・除草ロボット導入に関しては、やはりコストが気になる。多くの経営体が集まった共同購入や、作業受託組織の設立など、生産現場を支える仕組みづくりの指導にも期待したい。 ・低木化する上でのデメリットとして指摘されている獣害対策はどうか。農業生産現場における近年の鳥獣被害は無視できないところまで来ており、その点でのさらなる対策技術考案も今後、求めたい。 ・現場には課題が山積している。課題解決を図るうえで普及指導の果たすべき役割(新技術の現場実証など)は多いので、多くの課題に向き合い、解決に向けて取組みを進めて欲しい。 ・ナシ以外の果樹農家でも、労力不足が共通の課題となっている。他の果樹でも省力樹形技術の現場実証に取り組んで欲しい。
その他					